

第1回地域包括ケア団地モデル検討会議 議事概要

- ・日時：平成27年7月3日（金） 午後2時から午後3時30分まで
- ・場所：文化フォーラム春日井 2階 会議室A・B
- ・出席者 : (委員) 19名
: (事務局) 青柳医療制度改革監、田中地域包括ケア推進室長 他

—議事概要—

1. あいさつ

青柳医療制度改革監あいさつ

葛谷座長（名古屋大学大学院教授）あいさつ

2. 議題（1）地域包括ケアシステム等について

事務局から、資料1～2について説明

【説明資料】

資料1 地域包括ケアシステムについて

資料2 検討の進め方

3. 議題（2）高蔵寺ニュータウンの概要等について

事務局から、資料3～5について説明

【説明資料】

資料3 高蔵寺ニュータウンの概要

資料4 春日井市の地域包括ケアに関連する主な取組の現状

資料5 石尾台・高森台における医療介護・住まい等の状況
(関係者からの聞き取り)

（高木委員（石尾台町内会自治会協議会会長））

- 私は石尾台3丁目に住んでいる。説明のとおり、急速に高齢化が進んでいるのが現状である。ただ、シニアの活動はそれなりに活発であるという感じはもっているが、一番問題なのは移動である。非常に坂が多いことに加え、公共交通機関はバスのみである。車が必要不可欠である。

（三浦委員（東高森台小学校区町内会・自治会地域連絡会））

- 私は県有地のすぐそば、東高森の方に住んでいる。石尾台と高森台が一つに括られているが、地域事情が異なると考える。東高森地域には病院・診療所は一軒もない。数年前に歯科ができただけで、商業施設もないし、生活する上で不安である。車がなければ生活が不便な地域だが、高齢で車に乗れなくなり、路線バス・買い物バスを利用し、買い物袋を提げて歩いて帰ってきているという、そういう人が増えているのが実情である。
- セブンイレブンのようなコンビニ等の配食サービスは以前に比べると増えてきており便利かと

思うが、利用するには、まだ障壁があるのも実情である。

- バスは循環しているため、往復には時間がかかる。車で送迎がなければ病院・診療所へ行くのも厳しい。また、そういった生活の不安が大きい。

(田島委員 (田島クリニック院長))

- 高森台に診療所がないというのは、大変住民の方につらいことだと思っている。
- お年寄りが集まる所がないとのことだが、石尾台、高森台も結構公園がたくさんある。お年寄りが集まるようなものに作り直したらいいのではないか。例えば、中国では運動する器械がたくさん置いてある。日本でお年寄りが運動できる公園というものは何もない。もう一度行政の方でも、その点を考えていただけるといいかと思う。

(三浦委員 (東高森台小学校区町内会・自治会地域連絡会))

- 石尾台は憩いの家とか集会場所が何箇所かあるが、私の住んでいる高森台には地域の人が使える公的な場所がない。町内会・自治会連絡会から市へ依頼し、昨年から小学校の教室を365日使えるようになった。
- 高森台県有地には何かできればいいということは町内会・自治会連絡会等で常に話題になる。気楽に皆さんが楽しめたり集まったりする場所があるといいなということが、住民の願いである。

(森長委員 (NPO法人ワーカーズかすが理事長))

- 私は石尾台に住んでいる。県有地というのは、私が散歩に行くコースの一つである。石尾台は多少なりとも集まる所はあるけれども、高森台は、全体が山であり、皆さんおっしゃっているとおり、商業施設等は山の下の方にある。大変高低差がある。高い所に住んでいる人は、買い物等も不便である。
- 石尾台も以前に比べ、バスの本数が減っている。乗客が少ないのだと思う。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- 実際に住んでいる方のご意見を聞いて、課題は、交通、コミュニティ・集まる場所、医療、の3つかと思う。
- この広大な地域に、地域包括支援センターがないというのは驚きである。ますます高齢化が進む中で、相談する場所が必要だと思うし、欠落しているかと思う。少し心配な事である。

4. 議題 (3) 団地モデルについて

事務局から、資料6について説明

【説明資料】

資料6 団地モデルについて

(柴山委員 (あさひが丘ホスピタル名誉院長))

- 先月、6月12日から14日に、日本老年学会で東京大学特任教授辻哲夫先生の超高齢社会のまちづくりについての特別講演があった。その中で、以前は亡くなる時の場所が、昭和20年代には医療機関が10パーセント程度だったが、現在では80パーセント程度が医療機関で亡くな

- っているということである。欧米は20、30パーセントなので、かなり高率になっている。
- もう一つ、フレイルという虚弱性の高齢者というか、そういう者との生活習慣病の事を触れられて、フレイルに関しては、サルコペニアを予防することが非常に有効であるという事である。これは予防に関係あることだが、それ以前の虚弱になる前の、プレフレイルという事に関しても、栄養と運動、それから禁煙、社会参加、そのためには介護予防や地域ケアが重要であるとおっしゃった。
 - 地域包括ケアに関しては、先ほど病院で亡くなる方が多いという問題についても、病院中心からの意識改革がかなり重要ではないかとお指摘をされている。
 - 団地モデルと同じような事を、千葉県柏市で、柏プロジェクトとして東大と国立長寿医療研究センターが協力して実施しているが重要なのは、市役所が事務局になって、それからもう一つは医師会が大事だということである。地域のかかりつけ医と、サービス付きの高齢者向け住宅、先ほど触れられた24時間対応の医療、介護、看護というような事。それからもう一つ、生きがいと関係あるけれども、高齢者で元気な方に多少の報酬をつけた農業であるとか、あるいは食事作りとか、学童保育とか、そういう所に半分ボランティアで少し報酬があるというような制度を作るといい。それから情報システムを活用し、多職種連携し、色々な職種で顔の見える関係会議が重要ではないかとおっしゃっていた。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- 柏市で、ご説明のあった柏プロジェクトだが、柏市は多分40万人位だと思うけれども、そこにもURの団地があり、あそこも高齢化率がたしか40パーセント位だったと思うが、そこを契機に東京大学とURと柏市と、あと医師会が、色々ソーシャルに取り組んでいる。
- そのコンセプトは高蔵寺にも恐らくあてはめることができるコンセプトだと思われるので、いい所取りでいいので、柏市の成功事例を高蔵寺にも入れ込んでいくことも、今後十分考えていかなければいけないと思う。

(高木委員 (石尾台町内会自治会協議会会長))

- 柏プロジェクトの話があったが、サービス付き高齢者向け住宅と包括ケアシステムを高蔵寺ニュータウンに作ったらどうかと服部先生と話をしたことがある。
- 高齢者にもっと色々社会参加してもらおう等、一緒に色々な事をしてもらおうことが非常に重要だと思う。これが長生き・元気の秘訣だという事を色々な本で読んでいる。今、石尾台は色々な事をやっている。ただ、参加しているのは女性の方ばかりである。女性の方は趣味をやる等、頻繁に催しものを行っている。男性はプライドがあるのか、男性をどう動かすかが非常に重要ではないかと思う。
- 柴山先生から話があったように、ボランティアで色々な事を考えたらどうか。例えば、野菜作りとか、あそこはものすごく広いから、果物畑を皆でやらないかとか、そういうものを加えて考えると、もっと高蔵寺ニュータウンの男性高齢者を動かせるのではないかと。これが非常に重要ではないかという気がしている。
- サービス付き高齢者向け住宅に住んでくれるかどうか、かなり難しいような気がする。私の周りの独居の方へ色々意見を聞いてみると、自分の家を去り難いとか、新しいコミュニティ、新しい人とうまくやっていくのを心配しているという感じがある。せっかくここで慣れたのに新しい所に

入って、新しい人間関係を作るのはしんどいなという思いがあるようである。その辺をうまくやらないといけない。また、独身寮みたいな住宅は好まないし、どういった所に入ってもらおうのか検討も必要と感じる。

(廣野委員 (春日井市介護保険居宅・施設事業者連絡会副会長))

- 介護サービスでは、男性にデイサービスに来ていただくことが非常に難しいことというのがある。ご意見を色々聞くと、初対面の所にぽんと入る、それから、その場に溶け込んでということに抵抗があるというのがあり、来ていただくのも何度かお話をしても尻込みをされるというのが多い。
- そこで、農業のようなものを介すと、じゃあやってみようと力を発揮していただける。それから、デイサービスでよく実施する、絵を描いていただくということも、石尾台、高森台の方々はハイソサエティの方が多いため、簡単な絵ではなく、油絵を基本からしっかりやる等、知識の豊富な所も活かしたサービスが必要な地域ではないかと考えている。我々から思うと、ヒルズ的な存在の箇所だと思うので、もっとおしゃれな方が住んでいる所を、一層引き出せば、おしゃれな介護、おしゃれなアクティブイメージングが可能ではないかと思っている。

(水野委員 (地域包括支援センター春緑苑))

- 私は地元の相談窓口としての感覚だが、資料にもあったとおり、URの地区と戸建ての地区がまたすごく印象が違って、URの方が、住宅地と比べて高齢化率が低いけれども、込み入った相談や、いわゆる困難事例の相談がとて多い地区になっている。それはなぜかと考えると、事例の多くは一人暮らしの方、独居率が少し高い、あとURは保証人がなくても入れるため、ご家族の支援者のいない入居者の方が多くて、そういう事例が大変多くなってきていると思う。
- 暮らせる住まいもすごく大事だが、住まい以外の地域の支援、ご家族の支援というものが中々得られにくく閉じこもってしまっている方達もいるので、そういう様な方達に、福祉の専門家や医療の専門家の人達が、手を差し伸べて支援をするような、少し意識というのを持たないと、そういう方達の本人の意思や気持ちが置き去りになってしまう。入院すると、本人はどう思っているのか分からないけれども、URに帰るのは無理だよねと周りの関係者の人がそういう風に思って、施設系サービスを勧めていくという傾向があるので、住宅とか環境を整えるのと一緒に、本人の意思を十分聞き取り、家に帰りたと思った時に、家に帰るにはどうしていいかを考える意識がきちっと持てるかどうかというのが、支援者側の私達としては課題かと思っている。

(竹内委員 (都市再生機構中部支社住宅経営部長))

- UR団地は全国的に高齢化が進んでいる。この超高齢社会に向かっていく中で、この住まいについてはコミュニティのあり方がどうあるかということで、昨年1月に有識者の先生方にお集まりいただいて、辻先生が座長となって、超高齢化社会における住まいのコミュニティのあり方についてのご提言をいただいた。その提言にはエイジングインプレイスが一つのキーワードになっている。エイジングインプレイスは、地域の中で生き生きと最期まで暮らせるという住まい、環境を目指していこうということである。もう少し掘り下げると、地域の医療、福祉の拠点として団地を使っていこうと、拠点化を目指していこうというものであり、この提言を受けて、昨年1月に、26年度から7年間に100団地の医療、福祉拠点を形成していくということで取組

を始めさせていただいて、全国で26年度については23団地で着手をさせていただいたところである。

- 先ほどの話のあった、千葉県の柏の団地もその一つであり、愛知県内でいうと、豊明団地がその第1号となっている。この地域医療福祉拠点の柱というのが、一つはミクストコミュニティであり、色々な人に団地で暮らしていただくという事、もう一つは地域包括ケアシステムの確立、構築である。これは必須と考えており、そのためには行政の方、関係者の方、地元の自治会だとかとどうやってネットワークを構築していくかということが極めて重要であると考えている。
- そのような中で、この高蔵寺ニュータウンを県内第2弾という事で、地域の医療福祉拠点の候補団地ということで、検討を進めさせていただいている。その検討が、たまたまこういう検討会議の開催とあわせて、URの内部でも行われているという事である。できたら次回の検討会議でも、その状況等についてご紹介させていただいて、私共の検討の内容を、この検討会議とうまく整合するような形で進めていけたらと思っている。
- また、できるだけ団地の中で長く暮らしていただけるようにと、自立する高齢者の方々に向けた住宅の供給という事で、健康寿命サポート住宅と呼んでいるが、そういった住宅をこれから供給していこうとしている。昨年も実験的に、他の地区であるが、供給してご意見をいただいているので、これについて、またご紹介できる機会があればと考えている。

(高木委員 (石尾台町内会自治会協議会会長))

- この団地モデルで資料6に書いてあるが、豊明など色々モデルをやっている。その中で、この団地モデルの一番のポイントは、サービス付き高齢者向け住宅を作るところにあるのか。例えば、豊明でやっているのはイメージとしては、藤田保健衛生大学があり、そこは色々な事をやっている。豊明の団地に学生を住ませるとか。それが一つのモデルではないのか。高蔵寺でやろうとしているのは、サービス付き高齢者向け住宅、これを中心としたモデルでやっていきたいというイメージか。そういう風に理解すればいいか。

(田中地域包括ケア推進室長)

- 我々が皆様方から、今回の会議の前にご意見をいただいた中で、今の状況ではこのまま住み続けることが難しいというお話をいただいていたため、例えば県有地があるので、そこにサービス付き高齢者向け住宅を建ててはどうかと。これは柏モデルと似たような形にはなるが、一つの提案、イメージとしてご提出させていただいたものである。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- サービス付き高齢者向け住宅は、これだけで全部かたがつくということではなく、中心と考えなくてもいいのではないか。これもあるということでもいいのではないか。なぜなら、UR物件を、また利用するという手もあるだろうし、今の県営住宅を利用するという手もあるだろうし、その中の一つとしてサービス付き高齢者向け住宅があると。

(田中地域包括ケア推進室長)

- 高森台・石尾台は、医療、介護の施設も少ないし、買い物の場所もない、集まる場所もないなど、色々なご意見をいただいていた。たまたま県有地があるので、ここに皆さんの集まる場所や、

高齢者の方々が住み替えれる場所を作って、周辺に住んでいる方々の支援も行っていく一つの拠点としてはどうかという考え方を、例として示したものである。

(高木委員 (石尾台町内会自治会協議会会長))

- 別に反対しているわけでない。ご提案のミソがそこにあるのかと思ったからである。私はいいい案だと思っている。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- これで対応できる人もいるだろうし、対応できない住民もいるので、一つのモデルだけでは完結しないと思う。

(田川委員 (県立大学教授))

- お話を伺っていて、地域の中で、そこに生活している方々が、自立した生活を継続していくには、足の確保が大事だと思う。名鉄バスも本数が減っているという事で、社会福祉協議会などを中心にして、元気な高齢者の方達の力を借りて、住民互助による有償サービス、移送サービスを立ち上げてみたり、あるいは空き住戸があれば活用し、集会場を設け、そこを拠点にして地域の住民の方達が、助け合い活動を展開していく事が出来るよう、場所の提供をしていただく取組が出来ないかと思っている。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- この課題、提案の中に、交通が抜けていると思った。買い物という視点はあがるが、人が動くのは買い物だけで動くのではない。移動手段というのは指摘しないといけない。私も同感である。

(森長委員 (NPO法人ワーカーズかすが理事長))

- 県有地の利用は、これから決めていく事だと思うが、どのようなものを作るにしても、子どもというか、若い人を巻き込むような仕組にして欲しい。

(服部委員 (中部大学教授))

- 私は市政アドバイザーを仰せつかっており、この高蔵寺ニュータウンの担当ということであるが、ニュータウン全体も今年度は未来プランを作ることになっており、プラン作りの責任担当をさせてもらっている。
- 検討会議と並行して、今年度中に未来プランを作っていくという事なので、ほぼ同時並行的にやっていく。今回出てきた団地モデルの考え方も、そのまま、ほぼ高蔵寺ニュータウンの活性化の課題そのものであり、表と裏で情報共有しながら進めていかなければいけないと思っているので、是非、事務局の方に情報提供しながら、情報共有をして進めていきたいと思っている。
- 高森台は非常に多様な土地利用で出来ている所であり、色々な課題というか特徴の縮図みたいな所がある。ニュータウンは、全体で2万戸の住宅があるが、ほぼ半分がURの賃貸で、残りのほぼ半分が戸建て住宅という事なので、UR住宅と戸建て住宅の2つの特性をどうやってクリアしていくのかという問題が、大きく出てきている。UR賃貸の中では、単身、独居老人、高齢者の方が非常に増えているという特徴があるし、戸建て住宅の方では、高齢の夫婦世帯が非常に増

えているという所があるので、それぞれの特徴を見ながらやっていかなければいけないという所をかなり意識しなければいけない。

- 高森台と石尾台では、特に周辺部の所は、すぐ後に山が迫ってきている。他の地区は隣に市街地が広がっていくが、ここは後背地がなく市街地に広がっていかない。東高森は、まさに一番への所にあり、ここにどのような施設立地を図っていくのか、非常に難しい課題を持っている。こうした周辺部分をどう使うかという課題があるのと、一方で、幹線道路沿いというのは別の特徴があるので、幹線道路沿いと周辺部をどう考えていくのかというのがある。特に幹線道路沿いには、集合住宅と戸建て住宅の真ん中みたいに、戸建てが隣り合ってくっついて建っているというタウンハウスがあって、住戸形式としては3通りあるというのを意識しなければならないのではないかと思う。その特徴をどうやって捉えていくのか。
- 高森台には、丁度真ん中に高森山という山がある。これは市民の方にとっては非常に象徴的な山だが、この周辺部はテニスコート、健康づくりに使われている。しかし、山の中には、やぶが多くて入りにくい状況にあり、この山をどうやって活用するのかというの、少しこの地区としては課題になってくる。この山が、例えば健康づくりの役に立つとか、何かうまく使っていけるといいという事を、少し意識していただくといいのではないかと思っている。
- 今回の検討は、あくまで高森台、石尾台という事だが、例えば一番最初に入居が始まった藤山台という地区では、小学校の廃校という問題があり、3校が1校になる。2つ小学校に空き施設が出てくる。3月に、その廃校になる小学校の施設を活用して何をしていくのかという方針を立てている。その中でやはり、高齢者の福祉の問題や、医療の問題や、それから多世代の交流の問題というのも扱っており、他の地域でどういう事が進んでいて、それに対応してここが何をしていくのかという整理が必要になってくるので、そのあたりも事務局の方とも情報共有しながら、次回位に情報提供できると思うので、そこも意識しながら検討を進めていかなければいけないと思っている。

(葛谷座長 (名古屋大学大学院教授))

- 要介護高齢者のことを頭に描いてしまうが、実はそうなる前の、前段階の介護予防に関する事も、この中で行っていかなければいけないわけである。冒頭、田島先生がおっしゃったように、公園の活用であるとか、いまの小学校の廃校の施設を使ってという事で、そういうのを利用して、この中で元気な高齢者を増やす、運動であったり、栄養であったり、フレイルであったりサルコペニアを予防する施策を同時に進めていかなければいけないと思う。
- 私は今回初めて高蔵寺を視察したが、田島委員が言われたように結構緑が多くて、公園があって良い環境と思う。一層素晴らしい団地になるように、この会がその形で進められれば良いと思う。

(以上)